立教大学ジェンダーフォーラム主催2019年度上映会＆監督講演会

映画『わたしたちの家』上映会＆清原監督講演会

清原　惟氏

2019.12.16（月）18:00–20:30
立教大学池袋キャンパス7号館 7102教室

片上平二郎：本日は、清原惟監督におこしいただきました。みなさんがいまご覧になった『わたしたちの家』はとても不思議な映画で、こういう種類の映画を見慣れてない人にはもしかしたら難解な作品に思えたかもしれません。監督にお話を伺いながら、この不思議な作品の魅力を解き明かしていって、そこからいろいろと考えていきたいと思っています。

ジェンダーフォーラムでは毎年ジェンダー関連の映画を上映する企画を年に1回行っているのですが、今回、わたしがその企画を担当するにあたり、いつもと違う方向性でやってみたいと思いました。大学で映画を上映する企画は、メッセージ性の強いドキュメンタリー映画をやることが多目だなと日頃感じています。ジェンダーフォーラムの上映会もその傾向は強めであるかもしれません。ドキュメンタリー映画は現実をえぐり出して、ここにこういう社会問題がありますよっていうことをわかりやすく教えてくれる作品が多いように思います。わたし自身、社会学者ですので、そのようなドキュメンタリーの持つ力についてとても評価しているのですが、あえて今年は変化球的に、そういうわかりやすさからかけ離れた、謎な感触の強い映画をやってみたいなと思ったんですよね。映画というジャンルの可能性は、むしろ、そういうわかりやすさからかけ離れた部分にもあると考えています。

そんな風に考えているときに、清原監督の名前が頭にふと思い浮かびました。ジェンダーフォーラムの映画企画として清原監督の作品を上映するのはおもしろいのではないか、なぜ自分がそんな風に思ったのか、まだ言語化しきれていないところもあります。それでも、清原監督の作品には確実に独自のジェンダー論的な視点が宿っているという確信があります。こういう企画を行う際には、普通、コンセプトを明確に立てて、それを説明して、観客のみなさんとそれを共有して開始するというのが一般的かもしれません。ただ、今回は、自分でその答えをあらかじめ用意しておくのではなく、清原監督とお話をしていく中で、なぜこれを自分がジェンダー論的な可能性をもった映画であるかと考えていくということをしていきます。

自分の頭の中で、この映画はこう解釈できて、このようなかたちでジェンダー論的だと思いますがどうでしょうか、みたいなことを早急にすると、映画の持っている可能性を自分の頭の中に閉じ込めてしまう部分があると思うんですよね。むしろ、一旦立ち止まって、そこにゴロッと存在している映画の謎に向かい合いながら、それを使って対話をしていくと、思いもしなかったもっと広い答えとか深い答えに行き着くことができるかも

きよはら ゆい，KIYOHARA Yui：映画監督

しれないと思ったところがあります。なので、客席の皆さんの力もお借りしながら議論を深めていけたらいいなという気分でおります。事前の打ち合わせでも、即興演奏的にやってみようと清原監督から言っていただけたこともありますし（笑）。

それではまず、簡単にこの作品についてお話を聞かせてください。

清原惟：まずこの作品がどういう経緯でつくられたかということを簡単にお話しします。この作品は、東京藝術大学の映画専攻映像研究科の映画専攻という大学院の修了制作としてつくられた作品です。映画専攻はほんとうに小さな、30人ぐらいしかいないような学校なんですけど、わたしはその監督コースに所属していました。他にも技術部のコース、撮影、脚本であったり録音であったりといったコースに分かれていて、みんなで一緒に実習として映画をつくっていくというような場所でした。その修了制作としてほとんど学生のスタッフでつくった作品になります。

作品が公開されたのは去年の1月ですね。渋谷のユーロスペースで最初に上映が始まって、全国何ヶ所か上映させていただいたり、10ヶ所以上の国内外の映画祭にも呼んでいただきました。大きなところだと、ベルリン国際映画祭などにも呼んでいただき、いろいろな国の人に観ていただきました。

今回、ジェンダーフォーラムに呼んでいただいたのですが、つくりはじめたときにジェンダー的な意識を強く持っていたっていうわけではありません。ただ、わたしはずっと女性が主人公の映画をつくってきていて。男性が主人公のものもあるんですけど、ほとんどが女性が主人公の作品で、今回の作品も女性たちが家に住んでいる映画にしたいという大きなイメージから出発しています。世界的にジェンダー問題が取り上げられる流れもあってか、映画祭などでも、何で全員主人公が女性なんですか？と聞かれたりすることも結構あり、そこに関心を持っていただいたりもしました。今回の上映会は、そういうことを自分なりにもう一度考える良いきっかけかもしれないと思っています。

片上：例えば、そういう風に、ジェンダーについての映画ですよねって言われたとき、素直に「はい」と感じるのか、それとも一瞬「あれっ？」と思う感じなのか、その辺ってどういう感じですか？　今回もジェンダーフォーラムのイベントでお願いしますと依頼しましたが、直ぐにすっとそれが納得がいく感じなのか、一瞬あれっ？っていうふうに戸惑う感じがあるのかとか。

清原：戸惑いは、あるといえばありましたね。ジェンダーフォーラムさんはジェンダーについて普段から深めているような場所だと思うのですが、そこまで突っ込んだことは、そんなに今まで話したりとかっていうのはなかったので。

片上：女性的な映画ですよねって言われたときとか、そのことをどう思ったりしますか？

清原：女性的な映画って言われることはあんまりないですね。映画自体がということですよね？

片上：はい。

清原：映画自体が女性的っていうことはあまり言われたりしないですね。逆に映画業界の人からは「若い女性なのになんか若い女性らしくない。もっと今の君らしさを出したらいいのに」みたいなことを言われることがあって……。

片上：ああ、もっと女性的な、ある意味では女の子性みたいなものを前に出してつくったら、もっとプロデュースしやすいのみたいなことを含めて……。

清原：そうですね。そういうことは言われたりしたことがあって。何だそれ？って感じなんですけど（笑）。これが今のわたしらしさというつもり

でつくってるので、その人が思う若い女性らしさを求められるというのは、ちょっとよくわからないなと。

片上：ああでも、多分その微妙な感じが、なんか男の人がつくった映画ではないけれど、いわゆる女の子カルチャーみたいなところとも違うその感じが、私が今回、清原監督をお呼びしようと思ったところでもあるかもしれません。ある種の女の子カルチャーへの関心、今、世間的に結構あるじゃないですか？

清原：はい。

片上：そういう女性性がもてはやされるみたいな。若い女性監督が映画をつくると、そういうフレームに自然に入れられるみたいなことがあるんだけど、それではない、独特の感じ、あえて乱暴に言葉を使ってしまえば、マッチョではないけれどガーリーでもないみたいな、そういうイメージでジェンダーに対する感覚を捉えられているのがこの映画なんじゃないかなと思ったことがお呼びした理由にある気がします。

清原：ただ何か、この映画にあえて性別をつけるとしたら何ですかねえ。でも、あんまりどっちにも振ってない中性的な感じの映画がしますね、自分としては……

片上：ただ、その中でも女性同士の関係とか、二人の女性が……

清原：そうですね、中を見れば……

片上：一つの家の中に、二組の女性たちがいて、という意味では、明らかに女性中心でつくられている映画であるはずなのだけど、いわゆる女性映画的なものとも違う、その感じが気にはなります。

清原：そうですね。さっきも言ったように映画祭でよく聞かれる質問で、何で主人公が全員女性なのかというものがありました。それについてお話をすると、わたし自身が女性ということもあり、女性同士の関係性みたいなものに関心がありました。子供の頃とか、今でもそうなんですけど、自分の周りでは4～5人くらいの女友だちのグループみたいなのが自然とでき上がる傾向があって、そういう友だち同士で一緒にいるときの感じが、すごい独特だなあと思っています。女性同士じゃなくて男性同士にもそういう、何か特別な関係ってきっとあると思うんですけど。

そういった女友だち同士の関係って、生理的なことなのか心理的なことなのかわからないのですが、友人って言ってしまえばそれで終わるんだけど、それでも何か名前がつけられないような関係性がある気がしていて。例えば4人とかでいると、なんというか……その場が家みたいな感じがしてくるような、何か空間が立ち上がってくるような感覚があるんです。そこでは自分がここにいることがすごい許されているような感じとか、そういうものがあったりして。

たとえば、作中の透子とさなの関係性についてはすごくいろんな捉え方ができると思うんですけど、見方によっては、ちょっと恋愛的な雰囲気もあるけど、でもやはりそうでもないというか。どこか名前のつけられない関係で、すごく親密だけど恋人ではない関係っていうのがあってもいいだろうなと思いながら描きました。もちろん恋人同士に見えてもいいんですが。

片上：不思議な距離感ですよね。友だちとも言い切れないし、とても微妙で複雑な……

清原：そう、家族にも成り切れてないけど、でも、そのどちらにもすごく近いというか。

片上：仲が良いけれど、密着した距離感ではなく、お互いにどっか距離をちゃんと取り合っているような感じもあるみたいな、その独特な関係性

のありようですね。いまの話を聞いて、清原監督のほかの作品を思い出しても、女性4～5人の作品って多いですよね。

清原：そうですね。2人組もありますけど。

片上：はじめて清原監督の作品を見たのは実は映画ではなく、坂藤加菜さん、中島あかねさん、よだまりえさんといった大学の同級生の方々と三鷹のSCOOLという会場でやった「曲がるための角」というパフォーマンスだったのですが、それも女性4人によるものでしたね。

清原：そうですね。なんかこう自然にそういう形になるっていうか、すごく緩やかな集まりなんだけど、ささやかな親密さがあるというような感じでした。

片上：単なる友だちとも違う関係だけど家族でもないし、かといって組織でもないし、不思議な人間関係が基本のユニットとしてある感じですね。男が4～5人つるむとああいうふうになるのかっていうと、やっぱり何かもう少し違う関係性ができあがる気がします。男子高校生の4人組みたいなの多いけど、何かああはならないなあと。

清原：そうなんですね。

片上：ただ女性的な関係性と言っていいかもしれないけど、例えば女子校的な女の子の関係性みたいなものを考えたとき、その中でその4人組って浮いてる感じの組み合わせなのか、それともみんなそういう感じでできあがっているのか感じなのかみたいのっては興味ありますね。清原監督が、女性一般の関係性をこの映画で描かれているような4～5人の関係みたいなイメージで見ているのか、それともちょっと、その関係を女性たちのコミュニティー一般とはまた別の関係性として見ているのか。

清原：どうなんですかねえ。

片上：女性一般の関係性って言ってしまうのはいささか危ない気もするんだけど、あえてそういう枠で見たらどうなるかなとか。

清原：何となく集まって来るような感じはあるような気はします。もちろん2人、1対1の関係っていうのがありつつも、いつも集まるグループみたいなのが、自然とできている気がする。一般的かはわからないんですけど、自分の周りはそういうことがよくありましたね。

片上：その関係性の風通しのよさみたいなところをこの作品は見ていて感じることができるように思います。それが今回、自分が映画をここで上映してみたいって感じた理由かなという風に思います。こういう関係いいよね、あるといいよねみたいな。大学もいま息苦しいこといっぱいありますし。

ただ、その中には、気持ちいいよねだけでは済まない、すれ違いとか寂しさみたいなことも多分入っている気もするんですけど、そのことを含めて、そういう関係を描いている感じは受けています。

清原：そうですね。

片上：そのことと絡めて、布の話も聞いてみたいと思いました。清原さんの作品、布とか編むとか縫うとか、そういうモチーフが多く出てきますよね。何かそれらは女性……、あえていえば女性的な、この社会における女性的なモチーフだなと思うところがありまして。ある趣味とあるジェンダーを単純に結びつけるのは危ない部分もあるのはわかっているのですが、あえてこのように聞かせてください。

清原：古着を縫うシーンがこの映画にありますが、この映画をつくっているときに、家と女性の

関係性みたいなのを考えていました。現代では家事は、女性だけがやるものじゃないという風になってきてはいますが、でもやはり、これまでの人間の歴史の中で家事とか料理とか裁縫とか、そういう家のことをするのは主に女性だったわけで、女性と家の関係には、どこか神秘的な結びつきがあるような感じがしています。そのことを女性が抑圧されているようなネガティブな方に捉えることもできるし、でもポジティブ、というか、神秘的で親密な関係性みたいな、何か秘密があるように感じていて。

例えば家って、男の人はどちらかというとステータスのため買ったりとか、実質的な暮らしのために買ったりもする人が多いと感じるのですが、一方で物質として家を欲しがったり、内装やインテリアをどうするかとかを積極的に考えるのって、やっぱり女性の方が多いように感じます。インスタとか見ても主婦の人がインテリアにこだわっていたりとか、物の収納方法を工夫したりしてるのを紹介してたりして、女性の方が家に対するこだわりが強いのかな、と思うんですよね。

片上：基本的に男性は家にいる時間が単純に少ないし、夜帰ってくるだけの場所みたいな感じでとらえてしまう部分はありますよね。自分なんかも、食事をつくるくらいなら外食でいいやと思ってしまうところがあるし、生活の中ですることの立ち位置みたいな部分で、男女間で違う傾向はありますよね。良い悪いは抜きとして。

清原：そうですね。その延長で、縫い物をしたりとか手芸をしたりとかいうのも、家の仕事につながっていて、家とか生活をどういうふうにつくり上げていくかという、女性たちのクリエイティブな仕事の一つかなあと思ってもいます。わたしも手仕事をするのはすごい好きで、昔撮った映画では、映画の衣裳とかも自分でつくったりしていました。そういう手を動かすことっていうのが、自分の創作にとってもかなり重要だなと思ってました。

あとはこの映画について言うと、縫うとか編み込むとか、そういうことが記憶につながってくるかなと思っているところがあります。劇中に透子がさなにむかっていう「記憶にしっかり縫いつけられたものは忘れない」っていうセリフがあるのですが、縫いつけたりとか編み込んでいく行為というのは、奥深くまで入り込んでいって、記憶の奥底にしっかり結びついているようなものであるという感じがしていて、家の記憶とか人の記憶みたいなこの映画のテーマともつながってくるかなと思いますね。

片上：そもそも縫うとか編むとかはつなぐ行為であるし、関係もつなぐ、つながるものであるので、独特な関係性の描き方と縫い物のイメージって結びつくものであるとも思うんですよね。あるものとあるものをつなぐこと。

事前の打ち合わせの時に監督とプラモデルの話をちょっとしていたんですよね。趣味の話として考えたとき、女の人の編み物や縫い物に当たるものってなにかといえば、男の子にとってはプラモデルからなぁとか。それもつなげる行為ではあるんだけど、プラスチックのパーツをパチパチと切って、それをガチャガチャとくっつけていく。切ってつなぐという意味では共通点あるけど、手の感覚としてはかなり違うんじゃないかなと。

清原：確かに接着剤でつなぎますね。

片上：そうそう。そして、基本的に映画って撮っ

たフィルムを切ってつなぐ作業じゃないですか。私は編集って作業がなにか好きで、シーンやカットをつなぐって行為に独特の興味があります。映画がそういう風につながってできているものであることに興味があるんですよね。

清原：うんうん。

片上：で、清原監督の映画を見ていると、そこにあるできごと同士のつなぎ方とかがなにか独特な気がするんですよ。縫物みたいなイメージで考えたとき、その独特さと縫い物のイメージは感覚的に結びつくところがあります。

清原：うんうんうん。

片上：あるできごととできごとをつなぐ。今あることと過去をつなぐみたいなことを見たときにも、私は結構、暴力的にガシャっと切って、パッとつなぐみたいな、暴力的なつなぎ方が好きなところ元々はあって。これはどこかマッチョな趣味だなと自分でも自覚しているのですが、清原さんの映画を見ていると、それとは別の物事のつなぎ方があるのかもしれないと想像力が刺激されます。

清原：接着剤でつなぐことと、糸でつなげるのは身体的な感覚は全然違いますよね。布のやわらかさとか糸がこう滑り込んで行くような感じとか、そういう感覚がもしかしたら女性の感覚とフィットするところがあるのかもしれないですね。

片上：この話は微妙なところで、生れつき男がそうだ、女がそうだっていう話ではなく、ただ、我々は歴史的にそういう風に趣味などについてもつくられているところがあったりするので、今現在、「男性」的な感覚、「女性」的な感覚みたいな「 」を付けたような意味で、ジェンダーと趣味やジェンダーと身体感覚の関係はあるようにも思います。当然、すべての女性がそうだとか、すべての男性がそうだという話ではないのですが。そして、一般的に男性から遠いともいる文化である編み物や縫物のイメージが映画に入ってくると、映画のつくり方や感触みたいなことも変わってくるのではないかと思います。

美術なんかでも、いろいろ見ていると、布や糸を素材にした作品が増えているように思って、これもそれまでの紙や金属でできた美術の世界とは別の世界をつくろうとしているように感じられます。ジェンダーフォーラムは学内で授業提供も行っていて、そこに碓井ゆいさんという美術作家の方に来ていただいたんですけど、彼女も布や刺繍をモチーフに作品をつくっている人でした。

最近社会学の世界でも趣味研究の一貫として、手芸への着目が見られるようになっています。編み物や縫い物が社会的にどのような趣味としてあったのかとか。そこから、趣味とジェンダーの話などにも話は広がっていきます。私はその世界には疎いのですが、そうとう巨大なマーケットになっているようですよね。手芸専門店があったりするし。

清原：今は手芸を売買するアプリとかもありますしね。

片上：その感じはおもしろいなあと最近、興味を持ち始めていました。多くの男性はふだん生きていると、そういうものがあることに気づかないまま生きているなっていうことに気付いたのですが、この映画を観ていて、そのことを思い出したりしました。

清原：それで言えば、洋服やアクセサリーとか自分の身につけるものへのこだわりも、女性の方が強いような気がします。そういうところからも、自分が身につけるものや、生活そのものを自分の手でつくりたいみたいな欲求が生まれてくるのかなあとも。

映画の服装のことについて言えば、さなという記憶喪失の女性は、最初に登場した、船の中

に乗ってたときは、すごいお化粧が濃くて、服もちょっとコンサバティブな感じというか、色合いも白とか薄いピンクのもので、スカートもぴったりしていて、いわゆる女性らしいと言われるような服装をしているんです。だけど、だんだん物語が進んでいくにつれて、もう一人の登場人物の透子の服を着たりするようになっていくんですよね。透子自身のキャラクターは結構中性的なので、灰色や茶色みたいな地味な色だったりして、ちょっとダボっとした形の服で、いわゆる女性的な感じの服ではないものなんです。さなは、典型的な女性像から、そういう中性的な人物像にどんどん移り変わっていく。同時に、化粧もどんどん薄くなっていくんですよね。

そういうステレオタイプなジェンダーがだんだんとそぎ落されていって、何というか素の自分に戻っていくのか、新しい自分を獲得するのか、そんな風に思っていました。

片上：その辺から、清原監督が考える「女性」性や「中性」性とは何かみたいなこと、考えてみるのもおもしろい感じですね。手を動かすという手芸的なものなイメージを通じて、むしろ中性的になっていくみたいなことがどういうことであるのかなどと絡めながら。そこから展開できる話もたくさんありそうですね。

と言いつつ、タイムキーパーの役割をしますが(笑)、実はそろそろ次のコーナーにいかないと大変なことになる時間になってしまいました……。

清原：実は今日は、もう一本、短編作品を持ってきていまして。

片上：最新作。

清原：はい。去年撮ったものなので、そんなに新しくないんですけど、一応、最新作の短編で、それも家と女性っていうものをテーマにしているのですが、また全然違う作品で。いきなりなんですけど上映します。

片上：これまでの話をふまえながら、その作品を観ていただいて、その後に変則的ですが、いきなり質疑応答コーナーにしてしまおうかなと思います。新しい作品を見たみなさんの感想を聞きながら、話し相手がわたしであるだけではみつけることができない清原監督の作品の論点をみつけていきたいかな、と。みなさんと一緒に謎を解いていきたいなと今回は思いました。

清原：『わたしたちの家』とは全然つくられ方が違う作品で、ほんとに少人数、スタッフが3人、出演者2人の5人でつくった作品です。映像的なクォリティの違いはあると思うんですけど、小さな集まりであえてつくろうと思ってつくった作品なので、その違いも楽しんでいただけたらと思います。

タイトルは『網目をとおる　すんでいる』という作品です。すごい風通しのいい家が出てきます。

『網目をとおる　すんでいる』上映

片上：それでは、見た直後の質疑応答に向かいましょう。

質問者A：本日はありがとうございました。今の作品を拝見して、またそのタイトルを見て思いましたが、すごく半透明といいますか、メッシュのテントの中を見ながら話をしているという感じがして、そのおぼろげなぼんやりとした視界の向うにある家の中を覗いているというような映像がすごく印象深いものでした。おぼろげなとか、曖昧なとかそういう形容詞から考えられるのは、視界的な空間もありますけど、それらは記憶にも使う言葉でもあるな、と。おぼろげな記憶とか曖昧な記憶というように。そういう風に考えると、メッシュの半透明な膜を通じて、視界的で空間的なものと時間的な記憶というものが、同じ土俵で描かれているんだなあという印象がすごく残りました。どっちの町でもあり、どっちの町でもないっていうナレーションのセリフもそのことを感じさ

せてくれて、先ほどの『わたしたちの家』もまさにそうだなと思いました。

質問したいのは、最初の『わたしたちの家』で、家の入り口に、それこそ半透明の引き戸みたいなドアと、それから縦にどんと下がってくるシャッターがありましたよね。そのシャッターと、半透明で曖昧なドアっていうものも、やはりそういう曖昧などちらでもないものを結びつけるみたいな、そういう意味合いをもっているのかどうか。また、あのシャッターは、どのようなイメージを持って使われたものなのかということをお聞かせください。

清原：あの半透明のものは、境界線を曖昧にするようなものだという風に考えています。今観ていただいた作品も『わたしたちの家』も、境界線というものについて考えてながらつくったものです。

『わたしたちの家』でいうと、まず2つの世界があって、その境界線みたいなものがすごく曖昧になっているなあと思います。わたし自身も子供のころに、ああいった並行世界があると思っていたことがあって。こう薄い皮をぺろっと一枚むいた先に、全然別の世界があるんじゃないかと想像していました。ほんとに薄い皮一枚というか、そういうような、何か非常に淡いもので世界が隔てられているような感じといいますか。『わたしたちの家』では、室内の美術でも真ん中に布を張って……、親子の方の物語ですけども、真ん中に布を張っていて、ちょっと半透明の布というか、何かそういう曖昧な境界線を意識したものを置いたりしています。あの入口の半透明の扉も、内と外の境界線を曖昧にしていて、あれがあることで、例えば土間の部分は元々土足で入る場所で、内であり外みたいな空間なんですが、それがより曖昧なものになっていたと思います。

シャッターはその対極にあるような感じで、外界を遮断したり、外から来たものを知らせるような役割かなと思います。最初に冒頭にセリが「今、シャッターの音、聞こえなかった？」と言うんですけど、あれは、外から来たものを知らせるための音といいますか。あの薄い透明なものが境界線みたいなものだとすると、シャッターは、何か呼び鈴みたいなものなのかな。

質問者A：あの半透明のドアは、元々、セットに使われた家にあったものなんですか？

清原：そうですね。もともとありました。

質問者A：それは狙ってそこを選ばれたのか、それとも、たまたま、「おっ、あるじゃん」みたいな感じですか。

清原：「おっ、あるじゃん」ですね。

質問者A：ああ、なるほど。

清原：基本的には、あの家と出会って、この家で撮りたいとなったときに、その家にあるものから物語を拾って立ち上げていくような作業をしていました。だから脚本も大分変えたりしていて、あの家をどういう風に映画として見せたらいいのかということを考えてつくりました。

質問者A：ありがとうございます。

片上：今、半透明についてのお話を聞いていて1つ聞きたいことが出てきました。2作目のタイトルの「すんでいる」って平仮名になっていますよね。

清原：はい。

片上：私はその「すんでいる」を透明な方の「澄んいでる」の方でとらえていたのですが、家に「住んでいる」でもありますね。それはダブルミーニング的に両方の意味を入れているってことで良いですか？

清原：はい。

片上：半透明でありながらも、そこにはタイトルの通り、澄んだ透明さも含まれているな、と。何かその感触は結構おもしろく思いました。半透明感と透明感が同時にある世界観みたいな。境界線の話も、区切られているんだか区切られてないかわかんないような感じになってますよね。そこにある関係性のイメージもまたおもしろいなと今、質問を聞いていて思ったので、ちょっと口を挟んでしまいました（笑）。多分皆さんに時間を使っていただいたほうがよい気もするので、何でも聞いてみたいことがあれば、どうぞ。

質問者Ｂ：最初、透子さんがさなさんを家に引き入れて、となりで布団に寝てたりするシーンがありましたね。これジェンダーというくくりの上映会なんで、これ同性愛的な感覚で愛情を感じて引き入れたのかなと思ってたら、それは違うんだなと段々と思って、そしたらさらに全く別の世界の親子が出てきて、これはサイエンスフィクションだなと思いました。もしかしたらどちらかの人のイマジネーションが別の片っぽうの世界をつくり上げてているのかな、とか。『2001年宇宙の旅』って観ましたか？　最後の方で船長のイマジネーションが真っ白い部屋をつくりますよね。あれを思い出しました。

この映画は、説明がすごく少な目なんで、それがすごいよくて、鳥肌が4回ぐらい立ちました。

清原：ありがとうございます。本当にどう捉えてもいいようにと思ってつくっていまして、どっちがどっちかの夢であったりとか、想像であったりというようにも見えてもいいし、よく言われるのは、どっちかがどっちかの後日談というか、例えばセリが大きくなってさなになっているとか、透子になっているとか。そういうふうに色々な見かたをしてもらえたらいいなと思ってます。

質問者Ｃ：『わたしたちの家』で透子さんたちのシーンで、青を基調にしていろんな布がお部屋にたくさんあったのですが、何かこだわりがあってそうしたのかなと思ったのでそれについて教えてください。その青は何か心理的なものなのかとか、彼女をあらわすものなのかとか。

そして、あのお家に出会っていろいろ脚本を変えられたり考えたりっていうことでしたが、単純的に2組の女性の内、どちらから撮影をして、どういう感じで撮影していったのかについて、教えてください。

清原：はい。そちらの物語は青が基調なんですけど、もう一方の親子の物語は赤を基調にしています。美術の色だけではなく照明の色や昼と夜のシーンのバランスなど、映像面でも2つの世界を分けようという風に考えてつくりました。

さなと透子たちの方は、夜の世界や、2人の寂しさみたいなものを表すために、青をテーマカラーにして、蛍光灯の冷たい色のライトを使ったりしました。セリとお母さんのほうの話は、日常の暖かさみたいなものを出そうと思って、昼間のシーンを多くしたり、暖色系のライトを使ったり、美術も赤を基調につくりました。

そしてもう1つの質問についてですが、先に撮影したのはセリたち親子の話です。撮影期間を真っ二つに区切って撮影していて、セリたちの撮影が終わった後に、完全に美術を変えて、もう一つの方の撮影をするという段取りでやりました。ですから、それぞれの物語の出演者は、現場では一度も会うことがなくて、この映画の世界と全く同じ状態でした。多分最初に出会ったのは上映のときです。もしかしたら上映のときに、スクリーン上で初めて出会ったかもしれない。それぐらい、全く別の世界として撮影しました。

質問者Ｄ：こんにちは。清原監督の後輩にあたる大学生です。清原監督の作品は、女の子たちが行っている行為が、なんだか普通の感覚とはちょっと違う感じを持っているように感じます。例えば、『すんでいる』だったら机の上に物を並

べたりしているし、『わたしたちの家』では、セリちゃんがジャンケンして家を出ていくとか、食べ物はこの最小限だけでいいとか。そういう不思議なキャラクターがたちつくられているなと感じていて、しかも、その行動が後々の話にちゃんとつながっていくようなつくりがされているなと思っています。このキャラクターたちってどういう風につくられているんですか？　何か、いるようでいないような人物ですよね。しゃべり方もちょっと不思議な感じがあります。

清原：キャラクターをつくるときは、それぞれなんですけど結構直感的なことが多かったりします。あとは身近な人でモデルがいるキャラクターもいたりするかなあ。実際、どうやってつくっているんですかねえ。

片上：イメージは先に頭の中に何かある感じですかね？　それとも、物語なんかを先につくって後からキャラクターができていくみたいな感じですか？　もしくは同時にポンと生まれてくるみたいな感じ？

清原：物語と同時の場合が多いですね。あとは自分の体験によるものですかね、一番は。自分自身が実際に体験したこともそうだし、自分がこの人だったらどうするだろうってことを考えてどうするかな、と想像したり。

ジャンケンのとことかは、どうなんですかねえ……、直感的に出てきたアイデアだったような気がします。

質問者E：立教大学の兼任講師をしております。実は、表象文化という授業を持っていまして、昨年度、山中瑶子監督をお呼びしてお話しいただいたんですけれど、その際に清原監督の作品を教えていただいて、今日、機会があったので観させていただきました。大変おもしろく拝見しました。

『わたしたちの家』は2つの物語が並行してあるような作品であり、なおかつ、その中に非常にさまざまな対照性が取り入れられているというお話があったと思うのですが、男性とか女性とか、そういった観点から見てみると、その対照性の中でもやはりセリさん、14歳の女の子が、非常に浮き上がって見えたんですよね。それはなぜかというと、彼女の男性に対する視線というか、他の女性キャラクターの男性との関係に対する視線が特徴的だったからです。セリさんのお母さんが新しい彼氏と遊んでいるのをセリさんが追いかけるシーンとかがありましたし、非常に衝撃だったシーンで、誕生日パーティーのときにワインにタバスコを入れて、ちょっといたずらを仕掛けるところみたいな。

そういう風に見てみると、セリさんの男性に対するセンシティブな面と、その他の女性の男性に対する無防備さが見えてきます。その辺について、監督自身はどのようにどのように感じでいらっしゃるのかってことをお伺いしたいです。

清原：セリちゃんはやっぱり思春期の女の子なので。思春期って、自分もそうでしたけど、男性とのかかわり方に意識的になるっていうか、どういう風に接したいかが、まだ自分の中で確立していないような時期だなあっていうふうに思います。そういう一般的な話もありますし、あとは、セリちゃんの場合、やっぱり、お母さんの彼氏だからすごくいやだってこともありますよね。そういう嫌悪感もありつつも、やっぱりお母さんのこともすごく好きだから、お母さんを応援したいっていう優しい気持ちもあって、お母さんの幸せを願う自分と、素直に嫌悪感を出してしまう自分の間で揺れている人物だというのは意識していました。

あとはお父さんの存在も大きいと思います。かつてこの家に住んでいたけど今はいないお父さんと、新しくこの家に来るかもしれない男の人との間で、すごい引き裂かれているんですよね。

片上：彼女がお化粧するシーンがあるじゃないですか？　先ほど、初めは化粧をしっかりしていた透子が中性的になっていくという話がありました

が、その辺を含めて、この作品のお化粧というモチーフも興味深かったりしました。

とか言いつつ、時間が来てしまいました。最後に監督の方から何か言い残したこととかあります？　残念ながら時間が来てしまったので。

清原：もう時間ですか？

片上：もうというか、実はオーバーしてます（笑）。この後、打ち上げにも行きますので、もしもっとお話したいなっていう方がいたら、どうぞというお誘いとともに、一応締めに向かいます。

清原：最後にする話でもないんですけど、言っておこうって思っていた話があります。『網み目をとおる すんでいる』っていう作品は、『わたしたちの家』から家の形が全然変わって、すけすけの風通しのいい家になってしまったんですけど、あれは蚊帳なんですね。蚊から身を守るための昔からある伝統的な物体なんですけど、何でそれを野外に建てて家みたいな感じにしようと思ったかと言えば、わたしがやってみたいことの一つに、野宿っていうのがあるんです。でも野宿って、女性がしようとすると危険だよって言われるじゃないですか。親なんかがまず心配するし、別にやっても大丈夫ちゃ大丈夫だとは思うんですけど、やっぱりどうしてもとがめられるような部分があって。それを正々堂々とやってみたいっていうような欲望があったんです。だから、誰かがそこに住んでいる部屋として野外に蚊帳を置いてみるということをしてみました。やっぱり女性が安心して野宿できるといいですよねえ。それだけの話なんですけど（笑）。意外と今の世の中ではむつかしいことですよね。

片上：いや、小さいことだと思われるかもしれないけれど、意外にそういう部分にこそ大事なことがあったりもします。私も結構、周囲の女性から野宿をしたいって話を聞きます。私は若いころ野宿旅行みたいなことを結構やっていたのですが、かなりうらやましがられたり。とりあえず寝袋だけ持って電車で旅行して、ここで降りてここで寝るかっていって、適当なとこで寝るみたいな。

清原：はい。

片上：男性ができて女性がやりづらいこと、男性が気ままにできて女性ができないことはさまざまな場所にあるなと言われて気付くことも多いです。細かなことに思われるかもしれないが、実は大事な問題はそういう細部にあるなという気もしていて。

清原：そうですね。

片上：今回いろいろお話ししていて、そこで出てきた布の話とかももしかしたらすごい細かい話ししていると思った人もいるかもしれません。ただ実際、我々の日常って、人間関係が4人、5人グループになりやすいですよねとか、布って何だろうとか、野宿って何だろうっていうことにこそ、意外に社会的な問題が隠されている物でもあります。大きな社会問題みたいな枠組みの中では小さくて見えにくくなってしまう話、例えば、野宿したいみたいなことが、人から見たらすごいくだらない話に聞こえるかもしれないけど、大事なことであったりもします。

野宿の話、最後にする話じゃないかもしれないけどって言われたけど、実はなんかそういうことこそが大事なものを内に含んでいるかもしれないし、そういう部分を広い集めるための素材として、清原監督の映画を上映したという意図もあります。

時間が来てしまったので、ここで終わりたいと思います。この時期にこの上映会を開いたのも偶然だったのですが、ちょうど外に出ると帰りに立教名物のクリスマスツリーが見えるはずです。映画にもクリスマスツリーが大事なアイテムとして出てきますが、映画の世界と日常が偶然、そういうかたちで連続しているのもおもしろいことでは

ないかと思います。

清原：そうですね。

片上：映画の世界と日常の世界が連続した感じで終われるかなと。そういう偶然を含めて、良い企画になったんじゃないかなというふうに思っています（笑）。清原監督、そしてご来場の皆さん、どうもありがとうございました。

清原：ありがとうございました。何かもしあれば、気軽に声かけていただければと思います。本当にありがとうございました。

〈拍手〉